

実務で使う“点”の知識が“線”でつながっていく



DIAMアセットマネジメント株式会社
運用ソリューション本部 本部長
運用ソリューション本部
クオンツ運用グループ グループリーダー

星野元伸氏

学んだ技術は実務に戻ってすぐに使えた

私は2000年に第1期生として入学しました。もともと管理工学を学んでいた私は、第一生命に入社し、DIAM設立とともに転籍、以来計量モデルをベースとした資産運用に携わっております。当初は、海外の論文をたくさん読みながら、「これは実務に使えるのだろうか」と検討していたのですが、実務の世界ではどうしても「点」というか「つまみ食い」になってしまいます。そんな時に一橋ICCSが開校したので、土台を学びたいと考えたのです。結果としては、2年間通って良かったです。点が線につながっていくように、とてもクリアになりました。具体的に良かった点はいくつか挙げられますが、まず一橋ICCSで学んだ技術は実務ですぐに使えるということです。デリバティブ・プライシング・モデルは実際の運用に使えます。またパソコンで統計分析を行うコンピテンシャル・ファイナンスも、一橋ICCSで書いたプログラムをそのまま活用できました。おかげで「金融の世界で、この部分は負けない」という自信もついたと感じています。その

自信は、お客様の資産を大切に運用する現在の業務においても、自分自身の大きな礎となっております。

大変な2年間の支えとなった楽しい授業

次に、2年間通い続けたことも自信につながっています。仕事をし、退社して一橋ICCSに行き、終わったら家に帰るとい生活は正直きつかったです。土日に図書館でまとめて復習するのに10時間かかったこともあり、試験前はICCSでも自習していましたから。それでも授業の楽しさは、日々大変さを補って余りあるものでした。

授業で使われるキーワードは実務で聞いていたので、そのキーワード群がつながっていく感触がつかめました。また一橋ICCSでは、社会人大学には珍しく修士論文がありますが、修論にまとめるうえで先生方のアドバイスを受けたことも良かったです。「修論は革新性もさることながら、2年間で学んだことをきちんと活かし、反映していくことが大事です」と言っていたことが、私の支えになりました。

もう一つの大きな収穫は、学生同士のネットワークです。皆さん、科目の成績よりも実力をつけて実務に戻れることを最優先にしていたので、議論も非常に活発でした。率直に意見を交わしたり、質問を合ったりする中で横のつながりが生まれたと思います。修了後10年も経ちますが未だにお付き合いが続き、つい先日集まりがありました。

間違いなく実力がつくプログラムなので、今後は部下などの若手が参加できる環境を整えたいと考えています。(談)

計量ファイナンスもビッグデータの時代です



一橋大学大学院
国際企業戦略研究科
中村信弘教授

私はもともと大学院では素粒子物理の研究をしました。そんな物理系の人間がファイナンスの世界に進んだのは、90年代に入り、日本の金融業界でも計量ファイナンスが求められる時代になっていたからです。「金融工学」という分野がまだ存在しない状況でしたので、大規模データの取り扱いや数理的思考に長けた私たちのような理工系の人材が、実務における計量ファイナンスの素地をつくっていったと言えます。

ただし体系的に学ぶ場がない。そこで2000年に一橋ICCSの金融プログラムを立ち上げたのです。この環境を活かして、金融工学や数理ファイナンスの知識を身につけて活躍する人材が増えていきました。

そして計量ファイナンス自体が研究分野として独立した現在、金融業界を担う人材には、金融派生商品、オプション取引、大規模なポートフォリオの最適運用などに関する知識が当然のように求められています。今後この分野は、テキストマイニングも含め、金融機関が持つビッグデータをいかにコントロールできるかが勝負の鍵を握ると考えています。その意味では、業界を問わずデータの分析や活用ができるスペシャリストが求められるでしょう。個人的に、特にIT分野は計量ファイナンスとの親和性は高いと思います。(談)

自分1人ではつukれないモデルを、ICSという環境で生み出したい

マクロ経済とファイナンスの横断的な知識を得るために



丸三証券株式会社
調査部 経済調査部長
安達誠司氏

私は2012年度からの2年間で修士課程を修了したあと、引き続き博士課程に進んで今は2年目を迎えています。

一橋ICSに通うきっかけは、「エコノミスト」という仕事柄、経済予測についての新しい手法等を学ぶ必要があるながら、日々の仕事の忙しさにかまけて、新しい知識の吸収を怠りがちになっていた自分に気づき、このままでいいのだろうか？という不安があったからです。外資系証券会社の調査部で経済調査をしていたのですが、リーマンショック後は特に、普通のマクロ経済分析をしていてはマーケットの動きについていくことができないという顧客の要請が高まり、マーケットと経済の関連性をわかりやすく顧客に伝えるという仕事の必要性が増してきました。その時にファイナンス分野の基礎的な知識が欲しいと思ったことが、入学を決めた直接的な理由です。

他の大学院も調べましたが、「計量ファイナンス」という形で、マクロ経済と金融マーケットが一緒に研究できる分野は一橋ICSしかありませんでした。特に、リーマンショック後は、経済と資産価格の変動の関係性が、平時のパターンと一変してしまいました。この

ように関係性の変化をいかに定量的に考察するかが重要になるのですが、それは既存のパッケージソフトではとても対応できませんので、自分でプログラミングする必要性が生まれました。これは当然自分1人ではつくれません。そこで一橋ICSという環境を活用しようと思ったのです。その目標は、一応は達成しましたが、修論が終わって振り返ってみたときに、研究でやり残した部分があると思いましたが、現在、博士課程に進んでいます。

クラスメイトの存在に助けられた面も

自分のゴールは、これまで関心がなかった科目とも密接につながっていることが分かり、しかも、理系的な分野を基礎から学び直さねばならず、当初の目的に最短距離で行かせてはもらえなかったというのが正直な感想です。特に金融数理について新たに学び直すことは大変でした。そこで私をサポートしてくれたのがクラスメイトです。数学が得意な方から「一緒に勉強しませんか？」と声をかけてもらったのは、数学の試験勉強をするうえで本当にありがたかった。また、遠慮なく意見を言い合えるコミュニティがあったことにも助けられたと思います。

一度金融の世界に行き、働くことによって問題意識を持ってから一橋ICSに入ると、大学時代と違い、勉強が楽しいと感じています。理論のバックグラウンドがないまま、現実の動きを仕事で追いかけていくのを見たほうが冷静に対処できますし、質の良い仕事ができることに、一橋ICSで学んで気づきました。見通しを立てるうえで、現実起こっていることを説明するうえで、バックグラウンドを持っていると全然違うと思います。(談)

資産運用の商品開発力が企業の競争力に直結します



一橋大学客員教授
林 文夫教授

この20年の間に金融理論は発展を遂げ、オプション理論でノーベル経済学賞を受賞する研究者も輩出しています。そしてどんな新しい金融派生商品が開発されるようになりました。ですから理系の知識がますます求められてきています。特に資産運用の投資戦略構築に限ると、企業内で実務を行う人材には、統計学の基本的な知識やファイナンスの理論も身につける必要がありますでしょう。

この場合の「実務」とはあくまで商品開発を指します。かつては伝票を切ったり発注をかけたなり、という仕事もありましたが、現在そういう仕事はバックオフィスの人が行うか、システムで誰でもできるようなっているか、どちらかです。資産運用の実務は商品開発(及びプログラミング)で、これが企業の競争力に直結しています。

その実務ではモデルを使って投資選択を構築するので、統計学や行列の演算が欠かせません。また、理論が必要な理由は、投資戦略を構築できたとしても顧客——年金基金、生命保険、都銀などの金融機関——に説明できなければならぬからです。20年前とは違い、今では顧客も相当研究を重ねていますから、「こうやってみたら何となく戦略が構築できました」では通用しない時代になってきています。(談)